

父親の子育て遂行と多元的なジェンダー意識の関連

巽 真理子

(大阪府立大学 ダイバーシティ研究環境研究所)

【要旨】

本稿では NFRJ18 を用いて、6 歳以下の子どもをもつ父親の子育て遂行と多元的なジェンダー意識との関連について考察する。日本社会では、父親の子育ては好意的に受け入れられるようになってきたが、実際にはそれほど進んでいない。家族社会学における父親の子育ての阻害／促進要因研究では、阻害要因として長時間労働があげられ、性別役割分業観説は支持されないことが多い。そこでの性別役割分業意識は「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という指標だけで測っている場合が多い。ジェンダー意識は複雑で多元的なものであるため、母親の子育て責任や男性の稼ぎ手責任についての意識も考察する必要がある。

そこで本稿では、父親の多元的なジェンダー意識と子育て遂行および労働時間の関連について分析した。その際には、意識が行為を規定するだけでなく、行為が意識を規定する可能性を探るため、父親の子育て遂行や労働時間からジェンダー意識への影響も分析した。その結果、父親がもつ母親の子育て責任に関するジェンダー意識から世話行為への影響や、父親の世話行為からジェンダー意識への影響が確認できた。これらの結果から、今後の父親研究では男らしさだけでなく、子育て遂行と関連のある、母親の子育て責任などの女らしさについても考察する必要性や、父親の世話という行為が「子育ては母親がするもの」というジェンダー意識を変えていく可能性が示唆された。

キーワード： 父親、子育て、ジェンダー意識、ジェンダーの多元性

1. 研究の目的

本稿では、NFRJ18 を用いて、6 歳以下の子どもをもつ父親の子育て遂行と多元的なジェンダー意識との関連について考察する。

日本社会において父親の子育ては、2010 年頃からメディアや政策で「イクメン」が多用されるなど、好意的に受け入れられるようになってきた。しかし、実際の父親の子育ては、それほど進んでいない。2016 年の社会生活基本調査（総務省統計局 2017）をみると、6 歳未満の子どもをもつ父親の週あたりの育児時間は 45 分で、2006 年からの 10 年間で 6 分しか増えていない。そして、その主な内容は「乳幼児と遊ぶ」が 20 分、「乳幼児の身体の手世と監督」が 11 分と、世話よりも遊ぶ時間の方が長くなっている。一方、母親の育児時間は 3 時間 21 分、うち「乳幼児と遊ぶ」が 57 分、「乳幼児の身体の手世と監督」が 1 時間 40 分

である。このように、いまだ日本では、時間も内容も男女間の差は大きい。

この現状をふまえて、日本の家族社会学には、父親の子育ての阻害／促進要因について多くの研究がある。石井クンツ（2013）によると、そこで検討されている主な仮説には、学歴や収入などの資源が相対的に多い方が育児・家事参加が少なくなるという「相対的資源差説」、子どもの数や年齢、親との同・別居などにより、家庭内で父親の子育て参加が必要とされている度合いによって変わるという「家庭内需要説」、父親役割を重要だと考える男性ほど子育てをするという「父親アイデンティティ説」、自由な時間をより多くもつ方が育児・家事参加が多いという「時間的余裕説」、伝統的な性別役割分業観に反対し、女性の社会進出について理解を示す男性ほど子育てをするという「性別役割分業観説」などがある。これらの検証結果は一致しておらず、その点からは父親の子育てへの絶対的な阻害／促進要因といえるものはない¹。その中でほぼ一致した結果が得られているのは「時間的余裕説」であり（加藤・石井・牧野・土谷 1998；稲葉 1998；西岡 2004；永井 2004；松田 2006, 2008 など）、阻害要因として「長時間労働」があげられ、「性別役割分業観説」は支持されていないとされてきた。

しかし近年では、「性別役割分業観説」を支持する結果も出てきている。NFRJの第1回（1998年）～第3回（2008年）の個票データを分析した松田（2016）は、依然として長時間労働が父親の育児参加の阻害要因であることを指摘する一方で、近年になるほど父親の性別役割分業意識と育児参加の関連が明瞭になってきていることも指摘し、性別役割分業意識の弱い父親ほど、子どもを世話する頻度が高まる傾向があるという。

では「性別役割分業意識」とは、何を指しているのだろうか。前述の松田（2016）を含めて、先行研究で「性別役割分業意識」の変数として使用しているのは、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」のみであることが多い。しかし、個人のもつジェンダー規範に関する意識（以下、「ジェンダー意識」）は複雑で多元的なものであり（大和 1995）、「男性は外で働き、女性は家庭で家事・育児をすべき」には反対しても、「子どもは母親の愛情がなければうまく育たない」や「家庭を（経済的に）養うのは男性の役割である」には賛成する場合もある（西村 2001；褰 2014）。つまり、1人の人のジェンダー意識の中には、夫婦間の固定的な性別役割分業には反対でも、母親や父親としての役割規範には賛成、というパラドックスが潜んでいる。そこで本稿では、このようなジェンダー意識の多元性に注目し、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という夫婦間の性別役割分業に加えて、「母親が責任をもって、主に子育てをすべき」という母親の子育て責任、「男性は一家の大黒柱であるべき」という男性の稼ぎ手責任についてのジェンダー意識を、「伝統的なジェンダー意識」として考察する。

他方、父親の子育てと男らしさ（Connell 2005 ほか）についての研究では、「男らしさとしての稼ぎ手役割」の重要性が示されてきた。多賀編（2011）は、かなり子育てに積極的な父

¹ 検証結果が一致しない理由として石井クンツ（2013）は、各研究における調査対象者の多様性や分析手法の違いをあげている。

親でも、多くは仕事に支障のない範囲、つまり一家の稼ぎ手の立場が脅かされない程度の育児参加に抑えていると指摘する。また Ishii-Kuntz (2003) は、母親同様に子育てしている父親は、自分のジェンダー・アイデンティティを男性／女性ではなく中性的な「人 (person)」と規定しながらも、仕事を辞めてまでケア役割を果たす母親と比較すると、父親は「男性としての稼ぎ手役割」を手放さないことを指摘している。巽 (2018) も、母親と同様に子育てをし、子育てのために仕事の時間を調整する父親であっても、職場における「男性は一家の稼ぎ主であるべき」という男らしさの影響を強く受け、男性としての仕事の責任や量を減らすことはなく、それを自明視していることを明らかにしている²。つまり、父親自身がつ、または職場における男らしさからの影響によって、父親は長時間労働になりやすい。そして前述のとおり、父親の子育ての阻害／促進要因研究では、ほぼ一致した阻害要因として「長時間労働」が指摘されている。そこで本稿では、父親の労働時間と多元的なジェンダー意識との関連についても考察する。

ところで、父親の子育ての阻害／促進要因研究の多くは、意識が行為を規定することを前提としているが、逆に、行為が意識を規定することも考えられないだろうか。たとえば庭野 (2007) は、父親が「世話役割」をするようになる契機が「子どもと2人きりになる時間をもつこと」であると示唆した上で、父親は子育てをすることによって、リベラルな性別役割分業意識をもつようになるという仮説を導き出した。子どもの世話という行為が、父親の性別役割分業意識に影響するのであれば、父親の意識が変わって子育てしたくなるまで待つのではなく、先に具体的な子育て遂行を促すことによって、父親のジェンダー意識を変えていくことも可能になる。そこで本稿では、父親の子育て遂行および仕事という行為が、ジェンダー意識に与える影響についても考察する。

2. 仮説

まず、男性としての稼ぎ手責任を重んじる父親は、労働時間が長くなるため、子育てに関わる時間が短くなることが指摘されていることから (多賀編 2011)、父親の伝統的なジェンダー意識が子育て遂行と労働時間に与える影響について、仮説 1 として下記の 2 つを立てる。

仮説 1a 伝統的なジェンダー意識に反対する父親の方が、子育てにより関わる。

仮説 1b 伝統的なジェンダー意識に賛成する父親の方が、労働時間がより長くなる。

さらに、父親の行為が伝統的なジェンダー意識を規定すること (庭野 2007) について検討するため、父親の子育て遂行および労働時間が伝統的なジェンダー意識に与える影響に

² これらはインタビュー調査という質的研究の成果であり、量的研究の結果として示されたものではない。

ついて、仮説 2 として下記の 2 つを立てる。

仮説 2a 子育てに関わる父親の方が、伝統的なジェンダー意識により反対する。

仮説 2b 労働時間が長い父親の方が、伝統的なジェンダー意識により賛成する。

3. データと変数

3.1 データ

NFRJ18 のうち、6 歳以下の子どもがいる有配偶の男性のデータを使用する。年齢は 60 歳未満、職業は正規雇用者に限定した³。さらに 1 日の平均労働時間が 1 時間以下と極端に短い者、および 17 時間以上と極端に長い者も、分析対象から除外した。サンプルサイズは 142 人である。

3.2 変数

父親の子育て遂行度 「子どもの身の回りの世話」(以下、「世話」と「子どもと遊ぶこと」(以下、「遊び」)の頻度について、「ほぼ毎日(週 6-7 日)」を 6.5 日、「1 週間に 4-5 回」を 4.5 回、「1 週間に 2-3 回」を 2.5 回、「週に 1 回くらい」を 1 回、「ほとんど行わない」を 0 回として分析する。

父親の労働時間 「1 日の平均労働時間」を、分に換算した値を用いる。

ジェンダー意識 「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」(以下、「性別役割分業意識」)、「子どもが 3 歳くらいまでは、母親は仕事を持たず育児に専念すべきだ」(以下、「母親子育て意識」)、「家族を(経済的に)養うのは男性の役割だ」(以下、「男性稼ぎ手意識」という考え方について、「そう思う」から「そう思わない」までの回答にそれぞれ 4-1 点を与え、得点が高くなるほど、その意識が高い価値観を表す尺度とする。

また、多変量解析の統制変数として、父親の年齢と教育年数を用いる。教育年数は、最終学歴が中学校を 9 年、高校を 12 年、専門学校(高卒後)・短大・高専を 14 年、大卒(4 年制)を 16 年、大学院・大学(6 年制)を 18 年とした。

分析に使用した各変数の基本統計量は、表 1 のとおりである。父親の年齢は 28 歳～54 歳と幅広く、平均は 38.25 歳であり、分析対象者の 53.5%は大卒程度である。子育て遂行度の平均をみると、遊びは週 3.67 回、世話は週 3.32 回であり、どちらも週の半分程度となっており、先にみた社会生活基本調査のような「遊び」と「世話」との間に大きな差はない。ま

³ 2016 年の国勢調査(総務省統計局 2018)によると、末子が 6 歳未満の夫婦世帯に占める「夫が雇用者」の割合は 82.7%にのぼる。

た、1日の労働時間の平均は9時間54分であり、日常的に約2時間の残業をしている計算となる。

表1 変数の基本統計量

父親	平均値	標準偏差	最小値	最大値
遊び	3.65	2.20	0	6.5
世話	3.30	2.30	0	6.5
性別役割分業意識	1.85	.85	1	4
母親子育て意識	2.13	.99	1	4
男性稼ぎ手意識	2.61	.94	1	4
労働時間	594.19	91.61	420	840
年齢	38.25	5.64	28	54
教育年数	14.58	1.70	9	16

変数の相関は、表2のとおりである。有意な負の相関を示しているのは、「遊び」と「男性稼ぎ手意識」、「世話」と「性別役割分業意識」「母親子育て意識」「男性稼ぎ手意識」であり、特に「世話」と「母親子育て意識」が強い相関を示している。また、「労働時間」とは「母親子育て意識」が、有意な正の相関を示している。

表2 変数の相関

父親	遊び	世話	労働時間
性別役割分業意識	-.163	-.240**	.156
母親子育て意識	-.148	-.322***	.278**
男性稼ぎ手意識	-.199*	-.219*	.093
年齢	-.021	-.041	-.115
教育年数	.010	.103	.072

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

4. 分析結果と考察

まず、仮説1について検証する。父親の子育て遂行度と労働時間を従属変数にした重回帰分析の結果は、表3のとおりである。「遊び」を従属変数としたモデルは、F検定の結果、有意であることが認められなかった。そのため、「世話」と「労働時間」を従属変数にしたモデルについて検討する。

「世話」との関係で有意な影響を示した項目は「母親子育て意識」のみであり、負の影響

を示したが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」は、有意な影響はみられなかった。

また、「労働時間」についても有意な影響を示した項目は「母親子育て意識」のみであり、こちらは正の影響を示したが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」は有意な影響はみられなかった。

表3 父親の子育て遂行度と労働時間を従属変数とした重回帰分析結果

父親	遊び	世話	労働時間
	β	β	β
性別役割分業意識	-.045	-.065	.022
母親子育て意識	-.010	-.214*	.280**
男性稼ぎ手意識	-.160	-.086	-.009
労働時間	-.203	-.142	—
年齢	-.053	-.050	-.131
教育年数	-.007	.087	.083
N	142	142	142
F 値	2.137	3.775**	3.081*
調整済 R ²	.046	.106	.069

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

これらの結果から、伝統的なジェンダー意識に反対する方が子育てに関わるという仮説 1a は、父親がもつ「母親子育て意識」の「世話」への影響については支持されたが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」の「世話」への影響、および伝統的なジェンダー意識の「遊び」への影響については、支持されなかった。「世話」は性別役割分業において女性の役割とされてきたものであり、女らしさの一つに含まれるものである（江原 2001）。「母親子育て意識」が強いと、父親は「世話」を母親に任せるものだと考えるため、父親自身が行う「世話」の頻度が低くなると考えられる。

次に、伝統的なジェンダー意識に賛成する方が労働時間は長くなるという仮説 1b は、「母親子育て意識」からの影響については支持されたが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」からの影響については支持されなかった。つまり、母親の子育て責任を重視する父親ほど、労働時間が長くなるといえる。これまでの男らしさの注目した父親研究では、父親の「男性稼ぎ手意識」が強いほど仕事にコミットすることが指摘されてきたが（Ishii-Kuntz 2003; 多賀編 2011 など）、今回の分析結果からは、父親がもつ「母親子育て意識」が労働時間に影響することがわかった。「母親子育て意識」が強い父親は、母親に主な子育てを任せることに抵抗がなく、それによって自身の労働時間を長くしていると考えられる。

つづいて、仮説 2 を検証する。伝統的なジェンダー意識を従属変数にした重回帰分析の結果は、表 4 のとおりである。「性別役割分業意識」を従属変数としたモデルは、F 検定の結

果、有意であることが認められなかった。そのため、「母親子育て意識」と「男性稼ぎ手意識」を従属変数にしたモデルについて検討する。

表4 ジェンダー意識を従属変数とした重回帰分析結果

父親	性別役割分業意識	母親子育て意識	男性稼ぎ手意識
	β	β	β
遊び	-.024	.083	-.117
世話	-.203	-.312**	-.128
労働時間	.112	.242**	.045
年齢	.037	.069	-.072
教育年数	.012	-.029	-.184*
N	142	142	142
F 値	2.092	5.204***	2.905*
調整済 R ²	.037	.130	.063

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

「母親子育て意識」との関係で有意な影響を示した項目は「世話」と「労働時間」であり、「世話」は負の影響を、「労働時間」は正の影響を示したが、「遊び」については有意な影響はみられなかった。「男性稼ぎ手意識」との関係では「教育年数」が有意な負の影響を示したが⁴、「遊び」「世話」と「労働時間」については有意な影響はみられなかった。

これらの結果から、子育てに関わる方が伝統的なジェンダー意識により反対するという仮説 2a は、父親の「世話」の「母親子育て意識」への影響は支持されたが、「世話」の「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」への影響、および「遊び」からの影響については、支持されなかった。つまり、父親は子育ての中でも「遊び」ではなく「世話」に関わることにより、母親の子育て責任を重視しなくなる可能性がある。

また、労働時間が長い方が伝統的なジェンダー意識により賛成するという仮説 2b は、「母親子育て意識」への影響は支持されたが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」への影響については支持されなかった。したがって、労働時間が長い父親ほど、子育ては母親がすべきという意識を強くもつ傾向が確認された。

5. 結論

本稿では、父親の子育て遂行度および労働時間と多元的なジェンダー意識との関連につ

⁴ 父親の「教育年数」の「男性稼ぎ手意識」への負の影響については、高学歴になるほどジェンダーについて学ぶ機会が増え、自身の男性としての稼ぎ手責任から解放されることなどが考えられるが、本稿で取り扱うデータだけでは十分な考察ができないため、今後の課題としたい。

いて考察した。

父親の伝統的なジェンダー意識の子育て遂行度と労働時間への影響については、「母親子育て意識」の「世話」と「労働時間」への影響はみられたが、「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」の「世話」と「労働時間」への影響、および伝統的なジェンダー意識から「遊び」への影響はみられなかった。また逆に、父親の子育て遂行度と労働時間という行為の伝統的なジェンダー意識への影響については、「世話」と「労働時間」の「母親子育て意識」への影響はみられたが、「世話」と「労働時間」の「性別役割分業意識」と「男性稼ぎ手意識」への影響、および「遊び」から伝統的なジェンダー意識への影響はみられなかった。

これらの結果から、本稿では下記の3点が明らかになった。

第一に、父親の阻害／促進要因研究であり支持されてこなかった「性別役割分業観説」については、先行研究と同様に、本稿においても、父親の「性別役割分業意識」からの子育て遂行度への影響は確認できなかった。しかし本稿では、ジェンダー規範の多元性に注目して分析した結果、父親がもつ「母親子育て意識」の「世話」への影響が確認された。したがって、本稿で主張してきたとおり、今後、父親のジェンダー意識と子育て遂行度の関連について考察する際には、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」という夫婦間の性別役割分業意識だけでなく、母親の子育て責任など、ジェンダー意識の多元性に注目する必要がある。

第二に、前述のとおり、父親の「母親子育て意識」の「世話」への影響が確認されたことから、父親の子育て遂行への女らしさからの影響が確認できた。父親の子育てと男らしさに関する先行研究では、男性としての稼ぎ手責任を重んじる父親は、父親自身や職場がもつ男らしさから、(母親と比較して)子育てよりも有償労働を優先しがちなことが指摘されてきた(Ishii-Kuntz 2003; 多賀編 2011; 巽 2018)。しかし本稿の結果からは、父親の子育て遂行とジェンダー意識の関連を考察する際には、父親が男性であることに囚われず、子育て遂行と関連のある「母親子育て意識」などの女らしさについても考察する必要性が明らかになった。特に、「母親子育て意識」から「労働時間」への影響も確認されたことは、父親の長時間労働には、父親自身の男性としての稼ぎ手責任からだけでなく、母親の子育て責任規範にもとづいた「子育ては父親が関わるより、母親に任せる方がよい」という考えが影響している可能性も示唆される。

最後に、先行研究で主に検討されてきた「父親のジェンダー意識から行為への影響」だけでなく、「父親の行為からジェンダー意識への影響」も確認できた。まず、「労働時間」の「母親子育て意識」への正の影響がみられたことから、労働時間が長い父親ほど「子育ては母親がするもの」というジェンダー意識を強く持つと考えられる。そして、「世話」から「母親子育て意識」への負の影響を確認したことによって、父親の世話という行為が「子育ては母親がするもの」というジェンダー意識を変えていける可能性が示唆された。庭野(2007)は、インタビュー調査の結果から「父親の世話遂行が、リベラルな性別役割分業意識をもつことにつながる」という仮説を立てたが、NFRJ18という量的データを分析した本稿でも、同様

の結果が確認できた。

今後の課題としては、NFRJの過去のデータの分析があげられる。本稿では最新のNFRJ18のデータだけを検討したが、NFRJ18と同様にジェンダー意識として「性別役割分業意識」「母親子育て意識」「男性稼ぎ手意識」の3項目が調査されたNFRJ03とNFRJ08でも、本稿と同様の結果が得られるか、または経年変化がみられるかについて検討していきたい。

本稿で、父親の世話という子育て行為とジェンダー意識との関連、特に女らしさとの関連が確認されたことは、今後の父親研究において、男らしさだけにこだわらず、幅広い多角的なジェンダー規範を視野に入れて研究する必要性を示している。

また、意識が行為を規定しているだけでなく、「行為が意識を規定している」と確認できたことは、今後の父親研究はもちろん、父親支援策にも影響を与えるだろう。厚生労働省のイクメンプロジェクトをはじめとする、これまでの日本における父親支援策では、まず父親がジェンダー意識を変えることによって、子育てに関わるようになることが期待されてきた。しかし、「行為が意識を規定している」のならば、父親のジェンダー意識が変わるのを待つのではなく、先に日々の具体的な子育て行為に関わるようにしていくことが、有効な父親支援策として期待できる。その際には父親の子育てとして、遊びではなく、世話に関わるのが重要なのは、本稿の結果からも明らかである。

[備考]

NFRJ18の調査概要の詳細については、第一次報告書を参照されたい。

(<https://nfrj.org/nfrj18publishing.htm>)

[文献]

裴智恵, 2014, 「性別役割分業意識の多元性と男性の育児参加」 渡辺秀樹・竹ノ下弘久編著『越境する家族社会学』学文社:20-36.

Connell, R. W., 2005, *Masculinities-2nd ed.*, Los Angeles: University of California Press.

江原由美子, 2001, 『ジェンダー秩序』勁草書房.

稲葉昭英, 1998, 「どんな男性が家事・育児をするのか? ——社会階層と男性の家事・育児参加」 渡辺秀樹・志田基与師編『階層と結婚・家族』:1-42.

Ishii-Kuntz, Masako, 2003, Balancing fatherhood and work: Emergence of diverse masculinities in contemporary Japan, J.E. Roberson and N. Suzuki (eds.), *Men and Masculinities in Contemporary Japan*, Routledge Curzon : 198-216.

石井クンツ昌子, 2013, 『「育メン」現象の社会学——子育て・育児参加への希望を叶えるために』ミネルヴァ書房.

加藤邦子・石井クンツ昌子・牧野カツコ・土谷みち子, 1998, 「父親の育児参加を規定する要因——どのような条件が父親の育児参加を進めるのか」『家庭教育研究所紀要』20:38-47.

- 松田茂樹, 2006, 「近年における父親の家事・育児参加の水準と規定要因の変化」『季刊家計経済研究』71:45-54.
- , 2008, 『何が育児を支えるのか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
- , 2016, 「父親の育児参加の変容」稲葉昭英・保田時男・田渕六郎・田中重人編『日本の家族 1999-2009 全国家族調査 [NFRJ] による計量社会学』東京大学出版会:147-162.
- 永井暁子, 2004, 「男性の育児参加」渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編『現代家族の構造と変容 全国家族調査 [NFRJ98] による計量分析』東京大学出版会:190-200.
- 西村純子, 2001, 「性別分業意識の多元性とその規定要因」『年報社会学論集』14:139-150.
- 西岡八郎, 2004, 「男性の家庭役割とジェンダー・システム——夫の家事・子育て行為を規定する要因」目黒依子・西岡八郎編『少子化のジェンダー分析』勁草書房:74-196.
- 庭野晃子, 2007, 「父親が子どもの『世話役割』へ移行する過程——役割と意識との関係から」『家族社会学研究』18(2):103-114.
- 総務省統計局, 2017, 「平成 28 年社会生活基本調査」.
- , 2018, 「平成 27 年国勢調査」.
- 多賀太編著, 2011, 『揺らぐサラリーマン生活——仕事と家庭のはざままで』ミネルヴァ書房.
- 巽真理子, 2018, 『イクメンじゃない父親の子育て——現代日本における男らしさと〈ケアとしての子育て〉』晃洋書房.
- 大和礼子, 1995, 「性別役割分業意識の二つの次元——『性による役割振り分け』と『愛による再生産役割』」『ソシオロジ』40(1):109-126.

Parenting of Japanese Fathers and their Pluralistic Gender

Mariko TATSUMI

Osaka Prefecture University

This paper describes that NFRJ18 data were examined about the relationships between the parenting of Japanese fathers who have children under 6 years and their pluralistic gender. In contemporary Japan, fathering is considered something positive, thus, fathers do not take child-caring as same as mothers in fact. The previous studies in family sociology about promotive factors and disincentive of parenting of Japanese fathers argue that one of the disincentives is not fathers' gender bias but father's long working hours. However, these studies use the only one gender index "Men should work at workplace, women should take child-caring and housework at home." Therefore, these studies are not able to analyze the pluralistic gender of fathers well.

This paper analyzes the relationships between father's pluralistic gender and parenting or the working time of fathers. I focus the affect not only from fathers' awareness to the behavior but also from their behavior to the awareness. I found that fathers who consider mothers should take child-caring mainly do not take care of their children well. And I also found the affect from fathers' child-caring to their gender bias which mothers should take child-caring mainly. Therefore, the future studies about fathers should analyze not only their masculinities but also their femininities. And if fathers take child-caring as same as mothers at first, they may be able to eliminate their gender bias about child-caring.

Key words and phrases: Fathers, Child-caring, Gender, Pluralistic Gender